

## 石橋文化センターの あゆみ

### ふるさと久留米への思い

石橋文化センターは、世界トップのタイヤメーカー、株式会社ブリヂストン創業者・石橋正二郎が、郷土久留米に建設寄贈した総合文化施設である。寄贈された1956(昭和31)年は、高度成長期が始まり、経済白書の「もはや戦後ではない」という言葉が流行した年でもあった。しかしながら、その経済成長に向かうまでの戦後の久留米は、終戦間際の空襲で市街地の3分の2が焼け野原となり、多くの人々がバラックに住んで生活に追われているような状況であった。正二郎は当時の社会環境が青少年の思想に及ぼす影響を憂えていた。そんな折、欧米諸国を視察した正二郎は、どんな小都市にでも公園の中に音楽堂や美術館、体育施設などがあり、子どもから大人まで楽しんでいる様子を見て、「これにならって文化を振興させたい」と石橋文化センターの着想を得る。1953(昭和28)年頃から土地を確保し、正二郎自ら図面に美術館や花壇、プールや体育館などを描き、基本構想をまとめた。久留米を「楽しい文化都市にしたい」という正二郎の愛郷心から生まれた石橋文化センターは、着工から1年、「世の人々の楽しみと幸福の為に」という言葉とともに、ブリヂストンタイヤ株式会社創立25周年記念事業として久留米市民に贈られた。



開園当時の石橋文化センター 1956年



図正面 みどりのリズム 1956年

### 石橋文化センター開園

1956(昭和31)年4月26日、秩父宮妃殿下をお迎えし、石橋文化センターの寄贈式が挙行された。寄贈された施設は、美術館、体育館、文化会館、50メートルプール、野外音楽堂、テニスコート、児童遊園地、ペリカン噴水、洋風庭園など敷地面積30,361㎡で、九州初の文化レクリエーションセンターであった。式典の後、庭園や園内各施設では、女学生によるメイポールダンス、自衛隊員のマスゲーム、婦人会の民謡舞踊、ブリヂストン・自衛隊・NHKプラスバンド演奏、招待選手による水泳、体操、テニスの模範競技など開園記念行事が行われ、招待者と一般入場者を合わせて約2万人の人々が「夢の贈り物」に喜び、共に祝った。開園後は周辺地域だけでなく九州各地から多くの団体客が押し寄せ、初年度の来園者数は56万5千人にも上った。当時の久留米市の人口は約14万人。まさに市民の4倍の人が石橋文化センターを訪れたのであった。



石橋正二郎より久留米市に目録贈呈 1956年



開園時の正門付近



美術館外観



BS・自衛隊・NHKプラスバンド演奏



秩父宮妃殿下によるテープカット



女子高生 256名のメイポールダンス



秩父宮妃殿下の記念植樹



体育館にてオリンピック選手模範体操



オリンピック出場候補選手模範水泳

## 石橋文化センターの あゆみ

文化ホール・会館完成空撮 1963年



### 施設の変遷

石橋文化センターは開園後、「文化と体育の殿堂」として様々な催しが行われ多くの来園者で賑わい、園内施設もその時代にあわせ拡充されていった。また一方で社会情勢の変化により、園内の施設は、一部その役割を終え、新たな施設へ生まれ変わるなど、様々な変遷を経てきた。

### 石橋文化ホール開館

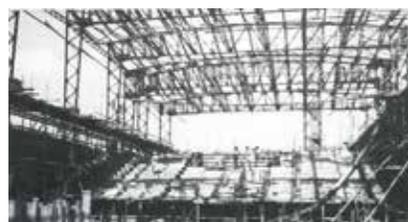
開園から7年後、1963（昭和38）年には、正二郎念願の音楽ホールを完成させ、久留米市に寄贈する。このホールも正二郎自らが平面図など基礎構想を作図し、それを基に長男でブリヂストンタイヤ株式会社副社長（当時）の石橋幹一郎が、久留米出身の建築家の菊竹清訓、NHK技術研究所の技術者らとともに基本構想をまとめ上げた。こうして生まれた石橋文化ホールは音響効果に優れ、「西日本一の音楽ホール」と謳われた。数多くの合唱団や吹奏楽団が、このホールを拠点とした活動の中で生まれ、丸山豊作詞・團伊玖磨作曲の合唱組曲「筑後川」などの名曲も生まれた。石橋正二郎、幹一郎親子の熱意により生まれた石橋文化ホールの開館により、市民の音楽活動が盛んな「音楽の街・久留米」の礎が築かれたのであった。



文化ホール正面 1963年



イメージ図

反射音線図 石橋文化ホール音響設計  
(NHK 技術研究所音響研究部)

工事写真 1962～1963年



久留米音協合唱団による「筑後川」初演。指揮 團伊玖磨氏



「筑後川」初演後の團伊玖磨氏と丸山豊氏 1968年

### 遊園地事業の開始

1960年代になると、余暇を楽しむ人々が増え、石橋文化センターも家族のためのレジャー施設としての機能が求められるようになってきた。そんな中1964（昭和39）年に始まったのが遊園地事業である。テニスコートの跡地に豆自動車コースが開設され、プールでは水陸両用車が運航し、子どもたちの人気を博した。またこの頃「こどもカーニバル」など子ども向けの事業が数多く開催され、多くの市民で賑わった。



豆自動車

### 日本庭園の完成

1969（昭和44）年、正二郎は石橋文化センターの敷地を拡張し日本庭園を寄贈することを発表した。造園を趣味とする正二郎が自ら設計し、東京から造園師を招き、耳納連山から石を運び、1971年に庭園の第1期工事と無料休憩所・楽水亭が完成した。この時の日本庭園寄贈式が、正二郎が故郷の地を踏んだ最後であった。翌年1972年に第2期工事を終えて日本庭園は完成し、石橋文化センターの敷地面積は開園時から約1.8倍の53,626㎡となった。約半世紀を経て風格を増し、四季折々趣のある表情を見せる日本庭園は、市民の憩いの場として親しまれている。



日本庭園・楽水亭

### 施設運営の転機

1970年代半ばに差し掛かると、県内外各地に大型レジャー施設やスポーツ施設が開場し、石橋文化センターの入園者数にも陰りが見え始めはじめた。1977（昭和52）年、久留米市における公共施設の整備の一つとして、市民図書館建設のため体育館と遊園地を閉鎖し、この年の4月から石橋文化センターの入園料も無料となった。また、開園時より財団法人久留米文化振興会（設立時は任意団体。1963年に財団法人化）が石橋美術館の運営を担っていたが、同年4月より久留米市の要請により財団法人石橋財団が運営を行うこととなった。正二郎の遺志により、同年7月に着工された石橋美術館増改築工事は翌年落成し、現在の建物の姿へとリニューアルされた。



石橋美術館増改築工事落成式

## 施設の変遷

### 坂本繁二郎旧アトリエの移転

久留米出身の画家、坂本繁二郎が数多くの作品を描いたアトリエは、没後、そのまま八女市に残されていたが、遺族の希望により、石橋幹一郎にそのアトリエが譲られることとなった。幹一郎は、1980（昭和55）年に石橋文化センター園内にアトリエを移築復元し、久留米市に寄贈した。これにより市民は日本近代洋画を代表する画家の制作の場とその息吹を身近に感じられるようになったのである。現在は季節の園内イベントに合わせてアトリエ内部を公開し、アトリエを活用した事業も実施されている。



アトリエ外観



アトリエ内部

### 動的文化施設から静的文化施設へ

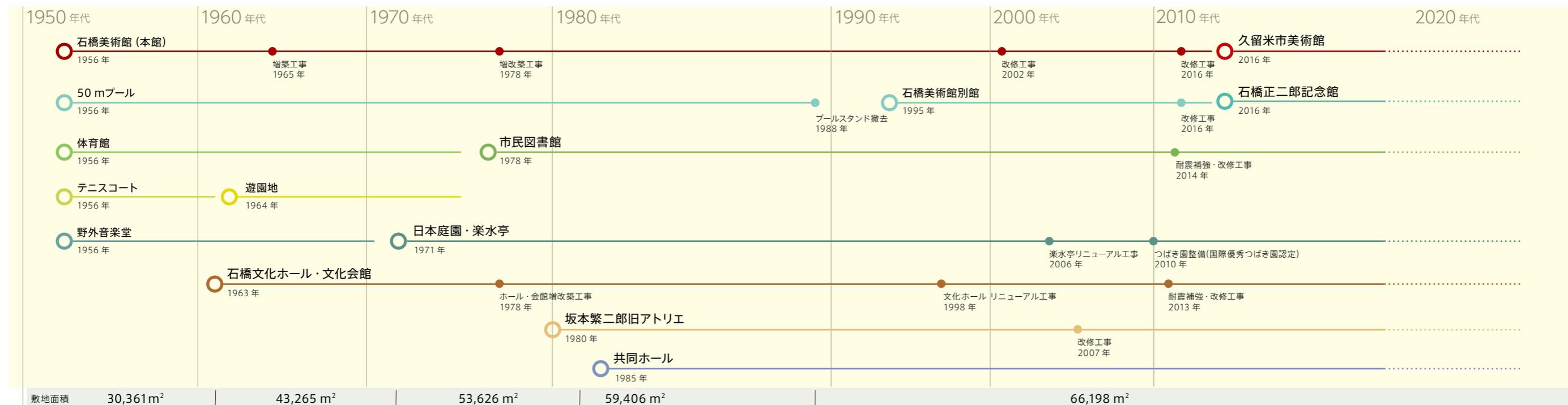
1993（平成5）年、石橋幹一郎により石橋コレクションの書画・陶磁器類を取蔵展示する石橋美術館別館を建設寄贈されることが発表された。翌年から50メートルプールを解体し、跡地に別館が建設され、1995（平成7）年に竣工した。開園時から多くの市民で賑わい、数々の記録が生まれた50メートルプールが、その役割を終え、新たな美術館が誕生したことにより、石橋文化センターは動的文化施設から静的文化施設へと移り変わっていったのであった。



石橋美術館別館開館記念式典・プール除幕



石橋美術館別館展示室



## 石橋文化センターの あゆみ

### 花と芸術の庭園へ

1996(平成8)年石橋文化センター開園40周年を機に、園内のバラをPRする「バラフェア」が始まり、現在では石橋文化センターを代表するイベントとなった。園内では、「香りのバラ園」や「つばき園」など花の見どころの整備が進み、「はなしょうぶまつり」「梅まつり」「つばきまつり」など園内の花をPRする事業も数多く実施されるようになった。2006(平成18)年、石橋文化センター開園50周年の年には、日本庭園にある楽水亭を、美術鑑賞後の余韻を楽しむカフェ&ギャ

ラリーショップとしてリニューアルし、憩いのスポットとして市民に親しまれている。石橋文化センターの敷地面積は、開園時から約2倍の66,198㎡となり、四季折々の花と美術館や音楽ホールでの芸術鑑賞が楽しめる文化施設として広く知られ、久留米市近郊だけでなく遠方から多くの人々にご来園いただいている。開園から60年の2016(平成28)年4月には、入園者の累計が2,750万人を超えた。



バラフェアコンサート



さくらコンサート



つばき園ガイドツアー



楽水亭紅葉カフェ内

### 新たな魅力発信に向けて

2016(平成28)年10月、石橋美術館は運営が久留米市に移行され「久留米市美術館」として名称を変えた。美術館別館は石橋財団により、正二郎の足跡を紹介する「石橋正二郎記念館」として生まれ変わった。新たな美術館では、「とき・ひと・美をむすぶ美術館」をビジョンとして、美術館事業を展開することとした。美術館を核として石橋文化センター全体をひとつのミュージアムと捉え、美術館事業を園内イベント等と連携させた新たな取り組みも始めた。

石橋正二郎と石橋幹一郎が我が子を育てるように慈しみ、市民からも親しまれてきた石橋文化センター。開園から60年を経たこれからも、新たな魅力を発信しながら、地域の文化芸術における情報発信・創造の拠点として発展していくことを目指している。



アートプロジェクト事業参加者



アートプロジェクト事業・ギャラリートーク



アートプロジェクト事業・作品制作



ミュージアムコンサート in 石橋正二郎記念館



ガーデンテラスコンサート